

大和路・信濃路

大和路・信濃路

昭和二十九年六月二十五日印刷
昭和二十九年七月五日発行

著者 堀 辰 雄

発行者 渡 辺 久 吉

印刷所 日本写真印刷

京都市中京区四条中新道

発行所

株式会社 人文書院

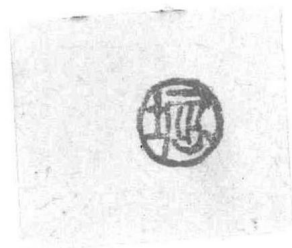
京都市下京区仏光寺高倉西

振替京都一一〇三番
電話下(5)三三四三番

本文紙 十条製紙都島工場
和紙 森田 繁商店

定価 五五〇円

地方 五六〇円



大和路・信濃路

大和路·信濃路

堀 辰 雄

人 文 書 院



1941年夏 輕井澤にて 著者

夫日の大和に往つて
馬酔木の花ざり
を以てようとして途中

木曾路をまはつて來
たり思ひけず雪が
ふつてみた

昭和十八年四月十三日

堀辰雄

「辛夷の花」より木曾福島の旅會にて著者記す

大和路・信濃路

目次

樹下

二

大和路

三

十月

五

古墳

一〇一

淨瑠璃寺の春

一〇九

「死者の書」

一一三

信濃路

一二

斑雪

一四七

橋の上にて

一五七

辛夷の花

一七

ノオト

一八五

跋

神西

清

二〇八

裝幀 恩地孝四郎

寫眞

大和路 入江泰吉

信濃路 「旅」編輯部

校訂 谷田昌平

樹下

——序に代へて



中宮寺 觀音像



樹下 石佛（信濃道分）

その藁屋根の古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小徑のかたはらに、一體の小さな苔^{こけ}蒸した石佛が、笹むらのなかに何かしをらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光つて見えてゐる。いづれ觀音像かなにかだらうし、しをらしいなどとはもつてのほかだが、——いかにもお粗末なもので、石佛といつても、ここいらにはざらにある脆い焼石、——顔も鼻のあたりが缺け、天衣などもすつかり磨滅し、そのうへ苔がほとんど半身を被^{おほ}つてしまつてゐるのだ。右手を頬にあてて、頭を傾^かげてゐるその姿がちよつとおもしろい。一種の思惟^{しゆい}像とでもいふべき様式なのだらうが、そんなむづかしい言葉でその姿を言ひあらはすのはすこしをかしい。もうすこし、何んといつたらいいか、無心な姿勢だ。それを拜しながら過ぎる村人たちだつて、彼等の日常生活のなかでどうかした工合でさういつた姿勢をしてゐることもあるかも知れないやうな、親しい、な^なに^にげ^げな^なさ^さなのだ。……そんな笹むらのなかの何んでもない石佛だが、その村でひと夏を過ごしてゐるうちに、いつかその石佛のあるあたりが、それまで一度もさういつたものに心を寄せたことのない私にも、その村での散歩の